

「ぼくはギャングになる！」

元気で明るくクラスの人気者だったエイジは偶然に偶然が重なった事件から、突然「らんぼう者」呼ばわりされてしまう。

「自分は変わってないのに、どうしてまわりの見る目は変わるのか？」

他者との関わり、他人の評価、徐々にはめられていく枠・・・そんな周囲に

とまどいながらも、自分を貫き通そうとするエイジと仲間達。

その先に見えてきた青空、その向こうにあるもの一。

受賞
2023年度 児童福祉文化賞



原作・阿部夏丸 脚色・いずみ凜
演出・中島研 音楽・曲尾友克 制作・西川典之

制作にあたって

子どもはしたたかだ。どんな時代であっても、どんな状況が襲ってきても、それを子どもたちの力で上手に乗り越えてきた時代があった。もしかしたら、今の子どもたちだって、自分の力で克服していく力を持っているのだろう。いや、持っているはずだ。実は今の大人社会のほうが、子どもたちを許容することができるかどうか、が問われているのではないだろうか。目の前にいる子がどうしたいのか、どうありたいのか、何故そうするのかより、その子の行動が世間の常識からはみ出していないかどうか、が基準になり、拳句の果てに子どもが動くより先に管理や制限をしてしまう。大人の子どもへのまなざしが子どもに寄り添うものであった時、初めて子どもたちが生きる輝きを放つはずなのに。

小学校3.4年生のことを総称し、ギャングエイジと呼ぶ。今もそれは変わらないはずである。しかし、周りの評価の中で自らを規制し、自分を表現することが出来ない子どもが増えてきているように思えてならない。

遊んだり、ケンカしたりを繰り返して、その中で遭遇したさまざまなトラブルに対し、排除の論理ではなく、自分の思いをぶつけ合い、這い上がっていく子どもたちの姿を表現してみたい。そんな思いが風の子中部の中からつつつと湧き上がってきた。

作家の阿部夏丸氏は語ってくれた。「子どもたちは、どうのこうのと評論する大人が一番信用できない。本質は昔も今も何にも変わっていないんですよ。変わったのは、大人社会のありようなんです。だから、僕ははとことん子どもたちを信頼していきましょうよ。」

「ギャング・エイジ」英二を中心に、その仲間たちが、彼らを取り巻く現実に向かい合い、立ち向かっていくことができるのか。それは、私たちのこの時代への挑戦かもしれないと思いながら。



劇団

風の子中部

☎058-215-7780

HP▶

